

東日本の地域間交流 Ⅲ—中部高地—

「南を目指した佐久の弥生人」から集団移住を考える

日時：2019. 2. 9・10

於：横浜市歴史博物館 講堂

小 山 岳 夫

「南を目指した佐久の弥生人」から集団移住を考える

小山 岳夫

(佐久考古学会)

1. はじめに

中部高地型櫛描文土器と炉の共通性から、弥生時代後期前葉に信濃佐久盆地から甲斐甲府盆地への集団移住があったことを推定した（小山 2017ab 2018）。

本稿の目的は、この1年間に実施した資料調査成果を集約して

- ① 竪穴住居形態や墓にも注目して先行論文で推定した佐久盆地から甲府盆地への集団移住仮説を補強する。
- ② 駿河の静岡清水平野、相模の足柄平野、相模平野の調査結果を追加して「金の尾式」土器の相模への進出状況を明確にする。
- ③ 東京都から神奈川県にまたがる東京湾西岸の内陸部に分布する「朝光寺原式」の調査を通じて「金の尾式」土器との関係を明示する。

以上3点である。

2. 先行論文の概略

(1) 栗林式土器と箱清水式土器

信濃千曲川流域は中期中葉～後葉は「栗林式」土器、後期は「箱清水式土器」に象徴される。

中期「栗林式」は下伊那盆地を除く長野県域に広く分布し、赤色塗彩壺と中部高地型櫛描文甕に象徴される「箱清水式」は後期前葉段階には主に千曲川流域に分布、中葉段階以降には壺の器形に差異が生じ赤彩も減じるが松本盆地にも分布する。

下伊那盆地には、畿内型櫛描文壺・甕の「中島式」、諏訪盆地北部から上伊那盆地は「箱清水式」「中島式」の折衷様式「橋原式」が分布する。

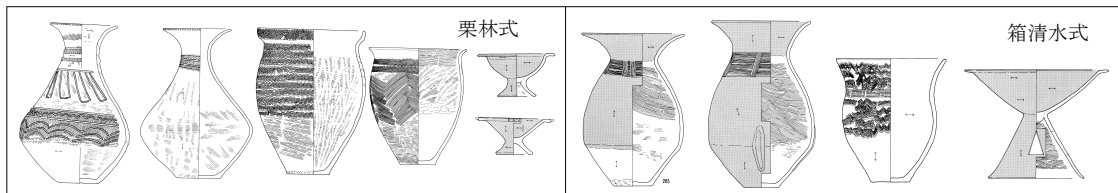


図1 「栗林式」土器と「箱清水式」土器（上段「松原遺跡 弥生・総論4弥生中期・土器図版」
下段「松原遺跡弥生・総論6弥生後期・古墳前期」
『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書―長野市内 その3―』より

(2) 佐久盆地の地域色

①「佐久系箱清水式」土器（仮称）

壺 頸部に施文幅の広いへら描矢羽状文が特徴

栗林式の施文幅の狭い矢羽状文が後期前葉（青木1～2段階）に継承された。長野盆地では幅の狭いまま後期前葉で終焉を迎え、以後壺は楡描T字文に統一される。

佐久盆地では後期前葉（小山後期Ⅱ段階）に施文幅の広い矢羽状文を採用。以降古墳時代前期まで楡描T字文とともに多用される。

時期		佐久盆地北部				長野盆地			
弥生後期前葉	小山Ⅰ期					青木1段階			
	小山Ⅱ期					青木2段階			
弥生後期中葉	小山Ⅲ期古					青木3段階			
	小山Ⅲ期新					青木4段階			
弥生後期後葉	小山Ⅳ期古					青木5段階			
	小山Ⅳ期新					青木6段階			
古墳前期前葉	小山古墳Ⅰ期古					青木4期			
	小山古墳Ⅰ期新								
古墳前期中葉	小山古墳Ⅱ期					青木5期			

図2 佐久盆地北部と長野盆地の後期弥生土器対比

甕 櫛描ヨコ羽状文が特徴

栗林式から継承。長野・佐久盆地ともに後期前葉では甕の上段に櫛描波状文、下段にヨコ羽状文・斜状文を組み合わせて施文。長野盆地では後期中葉以降ヨコ羽状文・斜状文が消滅するが、佐久盆地では中葉以降古墳時代前期まで櫛描波状文とともに主要文様として併用される。壺の矢羽状文よりも成立が遅い。

佐久盆地北部に分布する以上の特徴を持つ後期弥生土器を私は「箱清水式」と区別して「佐久系箱清水式」土器と仮称した（小山 2017a）。

②「佐久系」土器敷炉

長野県は弥生時代中期後葉から古墳時代前期にかけて地床炉に加えて土器使用炉や石囲炉が存在する。地床炉一辺倒の周囲の地域に比して特殊な炉を多用する地域である（小山 2017b）。

土器使用炉には埋甕炉と土器敷炉がある。土器の底部などを火床とする土器敷炉は弥生時代中期後葉に佐久盆地で生起。後期中葉以降弥生時代末まで佐久盆地北部の主体炉となる。私はこの炉を「佐久系」土器敷炉と呼ぶ。

(3)「佐久系」の甲府盆地・諏訪盆地南部への移動の目的は移住

弥生後期前葉の山梨県甲府盆地と長野県諏訪盆地南部茅野市域は「佐久系箱清水式」土器と「佐久系」土器敷炉の分布域である。私は両地域とも「佐久系箱清水式」のうち、施文幅の広い矢羽状文壺だけが見られ、ヨコ羽状文甕が見られないことから、後期前葉という限られた時期に佐久盆地からもたらされたものと考えた。両地域には「佐久系箱清水式」土器のほか、長野県の南信系土器や東海系土器も混在している。

中山誠二は山梨県の後期弥生土器を総称して「金の尾式」と呼び（中山 1999）、稲垣自由はこれを発展的に継承して「金の尾式」をⅠ段階・Ⅱ段階・Ⅲ段階・Ⅳ段階に大別、さらにⅠ段階を古段階・新段階に細別した（稲垣 2015）。「佐久系箱清水式」土器が「金の尾式」において主体を占めるのは後期前葉～中葉に当たるⅡ段階までで、Ⅲ段階からは菊川式など東海東部系土器の影響が強まる。

「佐久系箱清水式」が主体を占めるⅠ・Ⅱ段階における「佐久系」土器敷炉は、単体では甲府盆地で22.5%、茅野市域で12.5%存在し、周辺地域の中では高い存在率を示している。これ以外に「南信系」埋甕炉は甲府盆地では10%、茅野市域では26.3%と高い比率である。土器様相と炉様相は相関する。

なお、諏訪盆地北部の岡谷市、下諏訪町、諏訪市などの諏訪湖周辺地域は後期前葉の空白地帯で、土器様相もわかっていない。

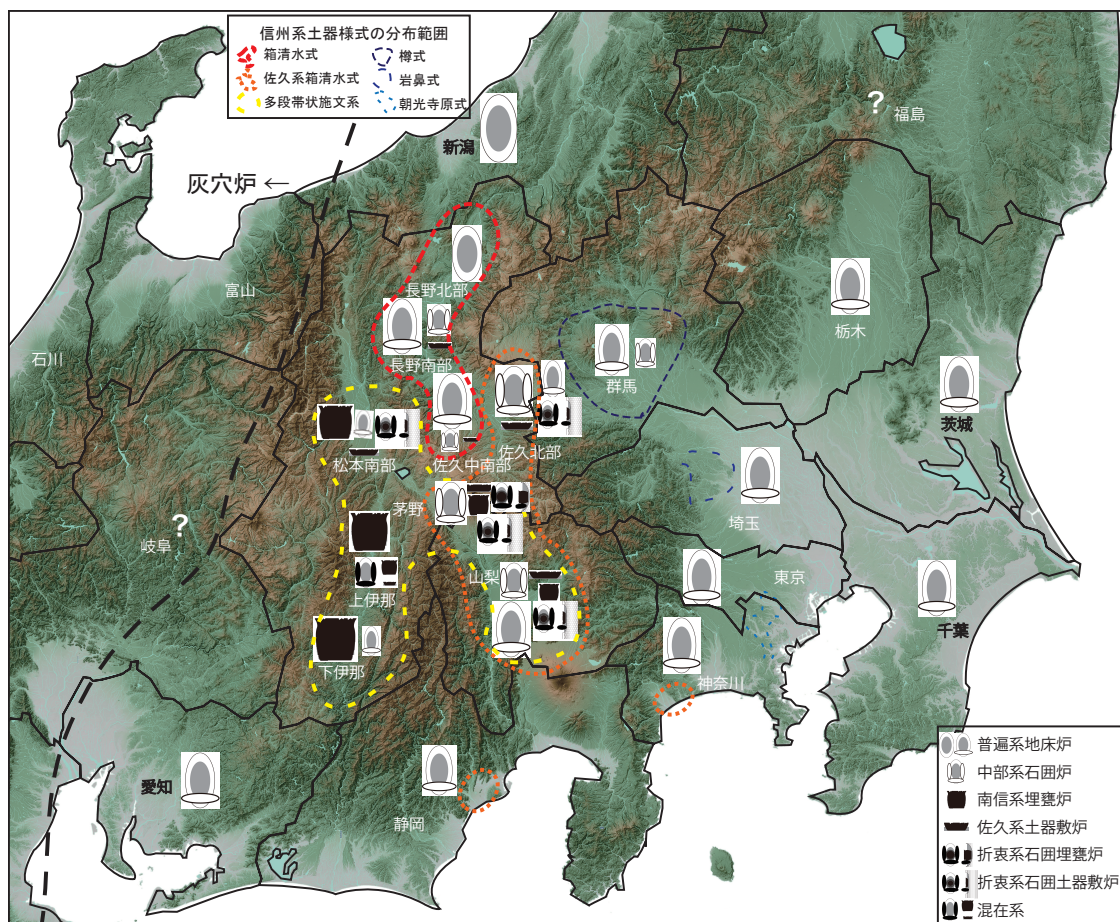


図3 信州を中心とした弥生後期前葉の炉の分布状況と土器様式図

以上、先行論文では主に土器様相と炉様相の類似を根拠として佐久盆地北部から甲府盆地と茅野市域への集団移住を想定した。相互交流としなかったのは、佐久盆地へ東海系土器などが不在の状況を根拠としていた。

集団移住の理由を要約すると、以下のとおりである。

弥生時代中期末＝栗林式終末段階の気候寒冷化という自然動態、鉄製品の普及に伴う長野市産の磨製石斧生産の衰退という社会動態など複合的な要因によって栗林末期には急激に人口が減少した。甲府盆地に割拠していた栗林式の集団も撤退した。空白地となっていた土地に後期前葉段階に至って佐久系集団が開拓のために移住した。

新天地への移住を決断するに至った理由は、当時人口が増加しつつあった佐久盆地よりも南方にあり、温暖な地域で安定した生産活動を求めた結果と推定した。

ここまでは佐久系箱清水式集団の南下現象にばかり注目してきたが、この頃の北（日本海側）の動きはどうか。佐久盆地は弥生時代を通じて北陸系土器の出土が誠に少ない地域で、この時期北陸系土器は全く出土していない。長野盆地でもこの時期後期前葉では、ほとんど出土していない。北陸系土器の動きが活発化し、長野盆地及び渋川市周辺など群馬県北部への移動が活発化する後期中葉（青木 1998、平林ほか 2014）からである。

2. 集団移住説を肯定するための新たな材料

佐久盆地北部の集団が甲府盆地や諏訪盆地南部の茅野市域へ移住した根拠を土器や炉様相の類似だけでなく、竪穴住居や墓の平面形態も比較・分析して移住の状況証拠を固めたい。

(1) 竪穴住居の平面形態

竪穴住居の平面形態も、土器・炉と同様に弥生中期から地域差が明瞭である。南関東の宮の台式から東海東部の有東式の竪穴住居は基本的に小判形で、これが後期まで継承される。いっぽう、栗林式土器の主たる分布域である中央高地、北関東は基本的に長方形であるが、長方形住居のみの状態が後期まで継承される地域は、長野県千曲川流域の佐久盆地、天竜川流域の上・下伊那盆地と群馬県・埼玉県比企丘陵に限られる。

千曲川下流域の長野盆地は日本海に近い事情もあって、中期栗林式古段階では日本海系の円形住居を受容するが、佐久盆地は長方形住居で群馬県側と同じ様相である。これ以降後期になると、長野盆地も長方形住居に転換し、千曲川流域全体が長方形住居主流となる。小判形住居は存在しない。

千曲川流域の土器様相はどうか。中期栗林式期の土器様相は、栗林式主体で宮の台式の存在は聞かず、有東式は佐久市森平遺跡で3例、西一本柳遺跡で1例、川原端遺跡で2例、長野市松原遺跡で1例をみる（内堀団 2014）。後期の東海東部の土器様式（菊川・登呂・雌鹿塚式）の出土は聞かない。

長野県中央部の諏訪・松本盆地、山梨県甲府盆地は長方形住居とともに小判形住居が混在する。

長方形統一の千曲川流域に比して、中期栗林式期の諏訪・松本盆地は小判形住居と長方形住居の混在地帯である。小判形住居受容のきっかけは、駿河や相模など太平洋沿岸の小判形住居が北上、住居が見つからないため実態不明だが甲府盆地を経由して諏訪盆地、さらに北上して松本盆地南部、後期中葉にはさらに北上し、奥部の松本盆地北部の大町市にまで至った可能性が高い。後期には小判形住居の北上と歩調を合わせるかのように南信系の「多段帯状施文系」（直井 2001）土器や三遠式銅鐸（三遠2式の塩尻市の柴宮銅鐸）東海地方由来と見られる土器・威信財が松本盆地まで北上する。

弥生中期の長野県には駿河か相模の太平洋沿岸の小判型住居が諏訪・松本盆地の順序で受容されたが、有東式の存在は現状で未確認である。しかし、甲府盆地の油田遺跡では有東式が栗林式に対して4割の高率で出土しているので、今後、諏訪・松本盆地で発見される可能性は高い。既存資料も洗い直さなければならない。

後期になると甲府・諏訪・松本盆地いずれの地域でも小判型住居と長方形住居の混在が確認できる。山梨県の場合、長方形住居の招来地がいくつか特定できないが、土器の変遷から見ても栗林式から一時期の断絶ののち、新たな集落経営がはじまった金の尾遺跡など甲府盆地の後期前葉の集落に存する長方形住居は、地理的位置から見て長野県の佐久盆地か諏訪盆地からもたらされた可能性が高い。佐久系箱清水式土器と佐久系土器敷炉の存在と考え合わせれば、やはり長方形住居の出自も佐久盆地とするのが穏当であろう。

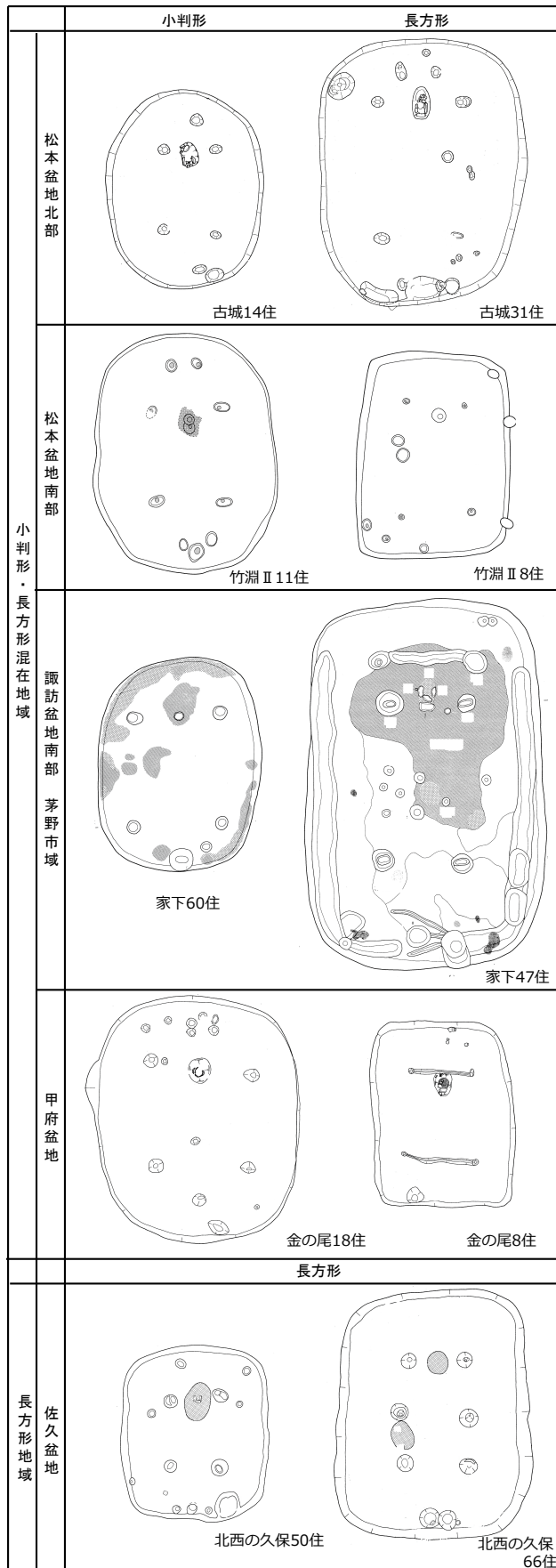


図4 小判形と長方形竪穴住居の混在地域

いっぽう、長方形住居と共存する小判形住居は、東海系土器が出土していることから駿河か相模から招来したものと考えて良い。

なお、諏訪・松本盆地では、東海東部の土器様式（菊川・登呂・雌鹿塚式）がやはり未確認である。これも中期と同様に見直しが必要である。

佐藤兼理は南関東東京湾岸の多摩丘陵に割拠した朝光寺原式土器が出土する集落からみつける「短辺張隅丸方形」の竪穴住居を小判形と長方形の融合とみて「朝光寺型住居」と分類した（佐藤 2017）。私も「朝光寺型住居」は宮の台式から継承した小判形住居と栗林式から継承した長方形住居の折衷と見ている。

甲府・諏訪・松本盆地は長方形と小判形が混在するが、折衷はしない。南関東の久ヶ原式集団内の居住地に移住した朝光原式集団は在来集団の伝統的な住居建築との融和を選択した。

いっぽう、甲府盆地、茅野市域などの空白地に移住した佐久系箱清水式集団は、南からの東海系移住集団と混在して集落を運営したが、お互いに住居建築は自らの故郷の方法と形を墨守したようだ。

先行論文では土器様相からその関係性の薄さを推察したが、竪穴住居形態から見ても、金の尾式と朝光寺原式の関係はやはり薄いと思われる。

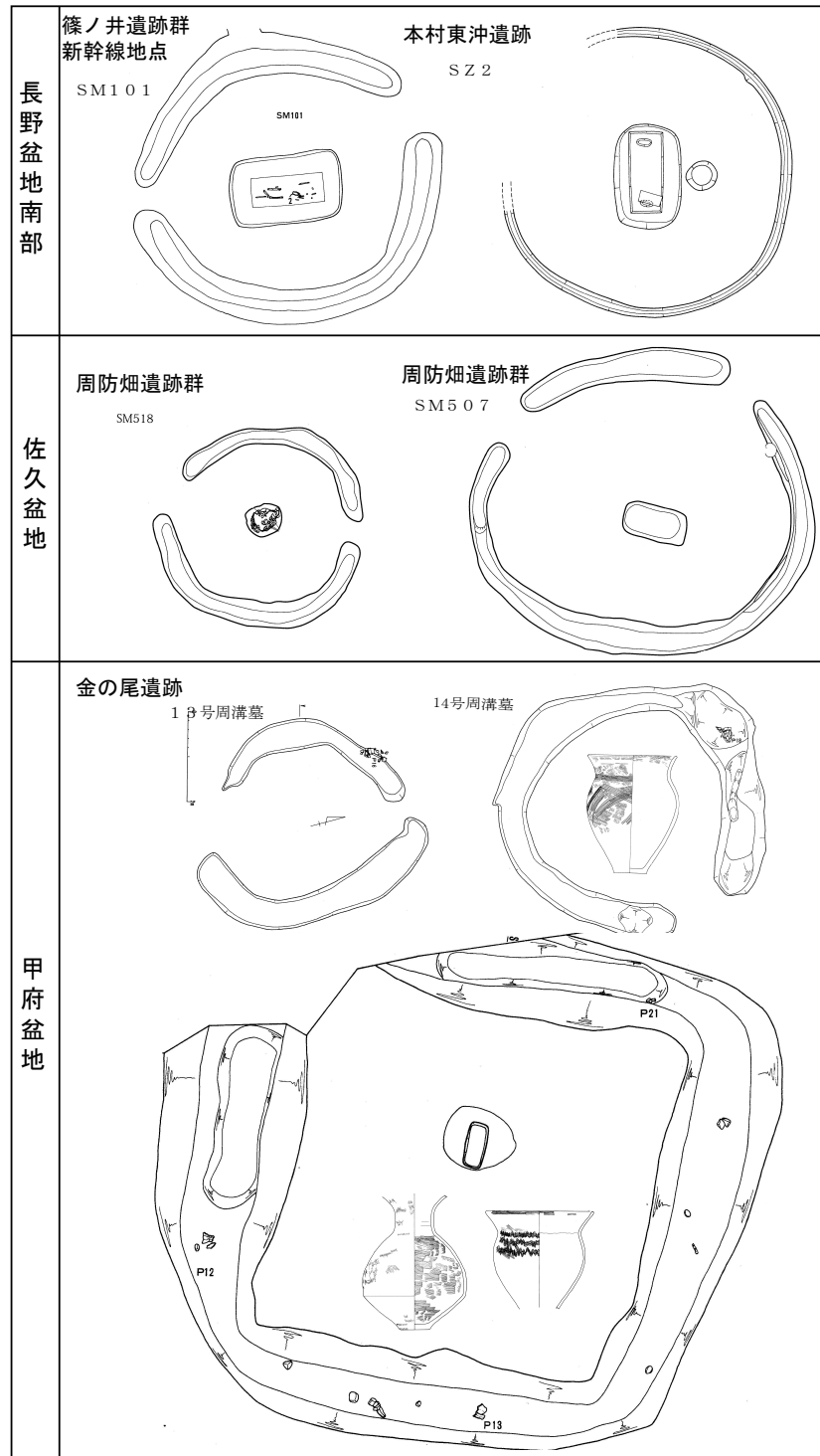
(2) 墓の平面形態

千曲川流域の弥生時代後期の墓は直径5m 内外で不整円形の周溝墓（以下「円形周溝墓」とする。）が主体的で、これは長野盆地・佐久盆地共通である。方形周溝墓は四隅切れタイプが後期を通じて佐久盆地限定で造営される。群馬から埼玉で造営される四隅切れ方形周溝墓が佐久盆地までは到達したものとみられる。

表 1 各地域の竪穴住居形態

時 期	長野 栗林～箱清水	佐久 栗林～佐久系箱清水	山梨 栗林～金の尾	茅野 栗林～金の尾	松本南部 栗林～箱清水系	松本北部 栗林～箱清水系	群馬 竜見町～樽	横浜・川崎市 (朝光寺原)
中 期	円形	長方形	(長・小判)	混在長・小判	混在長・小判	—	長方形	小判形
後 期	長方形	長方形	混在長・小判	混在長・小判	混在長・小判	混在長・小判	長方形	折衷長・小判

図 5 円形周溝墓の比較



千曲川流域で一辺 10m を超える方形周溝墓が造営されるのは、後期後葉以降である。

山梨県では、金の尾遺跡で円形周溝墓と方形周溝墓の混在が認められる。14 号（円形）周溝墓は直径5m 内外で小型、出土土器が多いわけではないが後期前葉（稲垣Ⅱ段階）の「佐久系箱清水式」が出土している。9号（方形）周溝墓は上の平タイプと言われる一隅にブリッジを持つ8m を測るもので、出土土器は後期中葉（稲垣3段階）で「佐久系箱清水式」と東海系が混在している。中央高地特有の円形周溝墓主流の段階から、東海系の方形周溝墓主流の段階への変遷が想定される。

墓の側面から見ても、後期前葉段階における円形周溝墓の長野県千曲川流域から甲府盆地への流れは明確である。地理的条件から見れば円形周溝墓の招来地は長方形住居と同じく佐久盆地と考えるのが適当である。

（3）移動の目的は新天地の開拓＝移住

後期前葉の土器、炉に加え、竪穴住居形態、墓の形態の比較を行った結果、佐久盆地と甲府盆地、茅野市域は「佐久系」と括れそうな共通要素が多いことが判明した。

繰り返しになるが、この時期佐久盆地への「東海系」要素の逆輸入は土器、住居形態、墓などからは認められない。今後、見つかる可能性もあるが、現段階では双方向の交流は認められない。一方通行の集団移住を主張しておきたい。

移住の契機は、人口増と気候条件が関与していたと考える。確実な証拠はないが、以下にその理由を推定する。

後期前葉の佐久盆地は、栗林式期終末における人口激減のショックから立ち直り、集落数・規模はともに復活しつつあった。とは言え、弥生集落が成り立つ佐久盆地平坦部は標高 700m 内外である。30 年ほど前に私は佐久盆地の弥生文化に「日本最高標高地点の弥生文化」の称号を冠した（小山 1990）。諏訪盆地と並び、最も高冷地にある弥生社会である。

因みに茅野市役所所在地は標高801m。日本の市役所の中で最も標高の高い場所にある。

集落数・規模が増え、生活が安定し始めた佐久盆地の弥生人に南の地（甲府盆地や茅野市域）には栗林式集団撤退後の空地があるとの情報が入った。当時の佐久の弥生人の一部は、新天地の開拓を目的に集団移住を決断・実行した。集団移住の結果、甲府盆地・茅野市域には「佐久系箱清水式」土器や「佐久系」土器敷炉高い割合で残された。

3. 「金の尾式」移動の目的は交易

（1）「金の尾式」太平洋沿岸への移動

① 駿河の状況

駿河の静岡清水平野では川合遺跡で、中期後葉から栗林式土器の流入が認められる。

壺は器形・文様が類似するものの、施文位置は本場のものとずれており、胎土も在地の有東式と差異がないことから駿河で模倣品が制作されたものと見ている。

甕は在地の胎土とは明確に異なり、灰褐色で緻密な胎土で雲母片を多く含有するためキラキラと光彩を放つ。私は甲府盆地からの搬入品と見ている。これらの甕は小型～中型品で、大型品はない。

後期前葉の類例は少ないが、瀬名遺跡の甕は川名遺跡の栗林式の甕と同様の胎土で、やはり甲府盆地金の尾式の搬入品と見られる。この甕も小型品である。

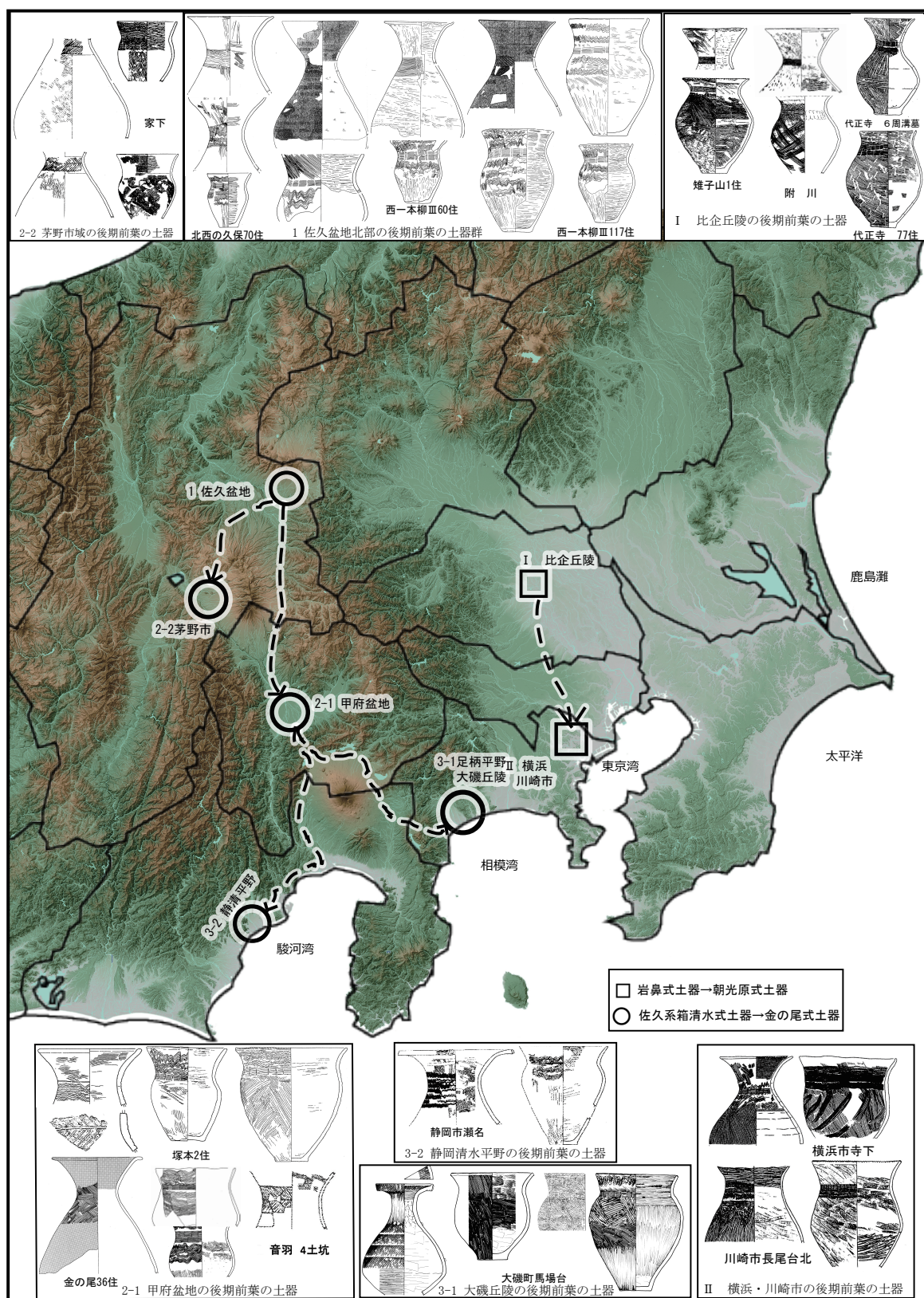


図6 「佐久系箱清水式」と「岩鼻式」の南下と「金の尾式」「朝光寺原式」の成立

静岡清水平野では中期後葉から後期前葉まで継続的に信州系土器が小型～中型の甕に限って搬入されていることが判明した。

② 相模の状況

相模では、2018年5月19日に足柄平野小田原市の調査を行ったが、中期段階では栗林式の搬入品は未確認であった。今のところ、中期段階における甲府盆地からの搬入を積極的に推す根拠はなかった（前言の撤回）。

後期前葉になると足柄平野の小田原市では、多数の遺跡から駿河出土のものと胎土を同じくする金の尾式の櫛描波状文甕の存在を確認できた。大島慎一によれば、「弥生後期の遺跡を掘れば、少量であっても必ず信州系の櫛描文土器が出る」というほど多く確認できた。金の尾式の組成の一つであるハケ調整甕も千代南原遺跡第Ⅶ地点第4号住居址、第9号住居址、諏訪の前遺跡で各1点確認でき多量の雲母を含む緻密な灰褐色の胎土であることが確認できた。

足柄平野の東に位置する大磯丘陵大磯町馬場台遺跡出土の櫛描波状文や刷毛調整の甕もやはり同じ胎土（立花 2009）で金の尾式の搬入品とみなすことができた。

金の尾式が確認できたのはここまでで、さらに東の相模平野平塚市真田北金目遺跡出土の甕（中嶋 2014）は、中部高地型櫛描波状文の施文が口縁部のみで胴部には施文されず、胎土も「金の尾式」とは異なっており、搬入品ではみなせなかった。

相模西部の「金の尾式」の分布は濃密、中央部付近になると「金の尾式」は希薄になり、それ以西は皆無になる状況が想定できる。

（2）携帯用甕を携えての移動

一連の調査で「金の尾式」は、甲府盆地から太平洋岸の駿河静岡清水平野と相模足柄平野の二つの地域に南下した可能性が高いことがわかりつつある。では南下の理由と目的は何だったのか。

太平洋岸で見られる金の尾式は小～中型甕に限られ、大型甕はない。甲府盆地にみられた「金の尾式」のようにすべての器種（壺・甕・鉢・高坏）が揃っている訳でもない。

甲府盆地の弥生人が太平洋岸を訪れるにあたり、交通路沿いの人家に宿泊して食糧を分けてもらえることもあるだろうが、宿が無ければ野営することもある。太平洋岸で発見される金の尾式の小～中型甕は、飯盒と同じ機能を果たした自炊用の調理器具だったと考えられる。

このような土器のありかたからみて、一家総出の集団移動は考えがたい。

（3）中央高地系炉や墓制など生活様式は持ち込まれず

住居形態はすべての資料を当たったわけではないので、中央高地の長方形住居の存在は確認できていないが、静岡市川名遺跡の有東式の竪穴住居はすべて小判形、沼津市雌鹿塚遺跡の雌鹿塚式の竪穴住居もすべて小判形であった。

炉は、地床炉か菊川式特有の火皿と呼ばれる粘土床炉で、中央高地にみられる土器使用炉や石囲炉は皆無のようである。

墓も円形周溝墓の検出は聞かない。

太平洋沿岸地域は住居建築や火処の構築、墓の造営など中央高地の生活様式が持ち込まれた痕跡がない。

携帯用小～中型甕に限定される土器のあり方、炉・墓などのあり方をみると甲府盆地の金の尾式集団が移住したことは到底思えない。むしろ何らかの目的をもって、太平洋沿岸の平野部に経営された集落

を訪れたと考えるべきだろう。

以下にその目的を考える。

(4) 太平洋沿岸進出の目的は木製品と雑穀の交易

先行論文で弥生中期栗林式期は、長野盆地産の榎田産磨製石斧と東海産の鋤・鍬などの木製品との交易があったことを想定した。今もその考えは変わらない。

では、磨製石斧生産崩壊後の後期、石斧に代わる交換財は何だったのだろうか。千曲川流域では後期に至っても、長野市石川条里・川田条里・榎田遺跡、佐久市後家山遺跡などで東海系の曲柄鍬が発見されているので木製品が東海地方から招来されていたことがわかる（臼井 2004）。

鉄製品などの金属器がとって変わった可能性については、以下に否定的な見解を示す。

横浜市受地だいやま遺跡出土の螺旋状鉄釧は中期末から後期初頭、横浜市E5遺跡の鉄剣・鉄釧は後期前葉、横浜市大原遺跡の鉄釧は後期中葉でいずれも方形周溝墓からの出土で、朝光寺原式土器分布圏内にある。また、いずれの鉄釧も幅広で段数が少ないのも特徴である。

いっぽう、千曲川流域では中期末～後期初頭、後期前葉の鉄剣・鉄釧はもとより鉄製品全般にわたって皆無という状態である。中期末の栗林式終末における集落の激減、後期前葉の集落の復興過程においては、千曲川流域の鉄製品の受容が停止されていた可能性が高い。鉄製品の需要が活発化するのには、後期中葉からで、長野盆地の螺旋状鉄釧は幅狭で段数が多く、「朝光寺原式」土器分布圏で見つかるものとは異なっている。

よって、駿河や相模そして朝光寺原式土器分布圏の鉄剣・鉄釧が日本海ルートで佐久盆地・甲府盆地経由でもたらされた可能性は限りなく低い。

鉄製品でなければ、佐久盆地・甲府盆地の特産品は何か。最近、種実痕分析の成果で千曲川流域長野・佐久盆地の弥生時代中後期の栽培作物であることが判明したコメとアワ・キビに注目したい。

馬場・遠藤の分析によれば弥生中後期ともにコメ、アワ・キビなどの雑穀の複合栽培がおこなわれていたことが判明している（馬場・遠藤 2017）。私はコメと雑穀の複合栽培は冷害を免れるための高冷地に暮らす人々の英知の結晶であったと考える。この複合栽培を佐久の弥生人は、甲府盆地に持ち込むために新天地の開拓を行ったのである。佐久盆地では複合栽培が第2次世界大戦時まで行われていた。

弥生後期前葉には、甲府盆地の金の尾式集団がコメとアワ・キビを特産品として駿河や相模を訪れ、木製品との交換を行っていた可能性があるとは私は考える。

以上、弥生中後期で交換財の違いはあるが、甲府盆地を介して長野県千曲川流域と太平洋沿岸東海地方の一角との交易が継続していた可能性について考察した。

なお、先行論文では、金の尾式の太平洋沿岸進出を開拓目的であったかのような記載をしたが撤回する。

4. 「朝光寺原式」と「金の尾式」の関係

(1) 「朝光寺原式」の調査

前述の甲府盆地に分布し静岡清水平野・足柄平野へも移動したと考えられる「金の尾式」と、同じ中部高地型櫛描文土器である横浜市保土ヶ谷区や川崎市青葉区一円東京湾西岸の内陸部に分布する「朝光寺原式」の関係性を探るため、2018年12月15日横浜市埋蔵文化財センター、横浜市歴史博物館所蔵の「朝光寺原式」土器の調査を実施した。調査対象としたのは「朝光寺原1式」の寺下遺跡YT-1・2号住居址、「朝光寺原2式」の関耕地遺跡46号住居址、「朝光寺原3式」の関耕地遺跡11号住居址出土土器（浜田 2009）である。

「金の尾式」が駿河・相模へ南下するのは、後期前葉＝稲垣自由の言う「金の尾Ⅰ式」段階で、これと同時期と考えられるのは「朝光寺原1式」寺下遺跡YT-1・2号住居址出土資料である。

両者を比較すると器形については「朝光寺原1式」の甕は、頸部の括れが少なく寸胴な器形が多くみられるのに対し、「金の尾Ⅰ式」の甕は頸部が明瞭に屈曲しメリハリの多い器形である。文様については、「朝光寺原1式」の櫛描斜状文はまばらであるのに対し、「金の尾Ⅰ式」の斜状文は密に施されるものが多い点で異なる。

刷毛調整の甕は「朝光寺原1式」は単位を観察できない軟質の工具を用いて浅く表面調整しているのに対し、「金の尾Ⅰ式」は木口状の工具で深い調整を施し、明瞭な単位を観察できる。

胎土は地元の「久ヶ原 1・2 式」（北川谷編年 1・2 期 古屋 2014）は大粒の砂粒を含み、粗い胎土であるのに対し、「朝光寺原 1 式」はきめの細かい精選された緻密な粘土である。これは「金の尾Ⅰ式」も共通する。含有物は「朝光寺原式 1」は長石と考えられる白色粒子や角閃石などを含むが、「金の尾Ⅰ式」特有の雲母を含む個体は多くの「朝光寺原1式」の甕を観察したが一点も存在しなかった。

雲母を基本的に含まない点は、「朝貢寺原 2・3 式」も共通している。このことから「朝光寺原式」の胎土は「金の尾式」とは異なっており、静岡清水平野、足柄平野のような「金の尾式」からの搬入品はないと判断できた。

(2) 「朝光寺原式」と「金の尾式」は無縁

以上から私は、同じ「中部高地型櫛描文」を持ちながらも文様・器形・胎土の相違から「朝光寺原式」の成立事情に「金の尾式」は関わっていなかったと考える。

埼玉県武蔵北半部の比企丘陵・入間台地を中心とする地域に分布する「岩鼻式」を研究する柿沼幹夫の「（「朝光寺原式」と「岩鼻式」の）形式的変遷はほぼ同調過程をたどり」（柿沼 2015）という指摘に象徴されるように、型式の共通性から「朝光寺原式」については従来から「岩鼻式」との関係の強さを指摘する研究者が多く、「金の尾」との関連を説く者は少なかった。

今回はこれまでの型式的特点だけでなく、胎土の比較から「朝光寺原式」の成立に「金の尾式」は関与していないとの結論に至った。「朝光寺原式」が生起する説を援護射撃する結果となった。

また、「岩鼻式」から「朝光寺原式」への影響は甕以外器種壺など土器総体に認められるほか、先述の堅穴住居の平面形態にも認められる。「朝光寺原式」土器の集団は、「岩鼻式」土器集団の一部が移住した可能性が高い。

5. まとめ

文頭で示した本稿の目的に対する結論を記してまとめとする。

① 土器・炉と共に竪穴住居や墓もその特徴からみて佐久盆地から甲府盆地へ齎された可能性が高まった。生活様式の4つの要素の移動は、佐久から甲府への集団移住を主張する自説を補強する。

② 小田原市内の諸遺跡には、「金の尾式」の搬入甕が多量に存在していた。弥生後期前葉における甲府盆地から足柄平野への人と物の流れの多さを想定させる事象である。しかし、現在確認できる移動は、「金の尾式」の中・小型甕に限られているため集団移住は考え難い。

③ 雲母を多く含む「金の尾式」の特徴的な胎土を視点において「朝光寺原式」を観察した結果、「朝光寺原式」土器群中に「金の尾式」の搬入品は存在していなかった。

型式的特点を勘案すると「朝光寺原式」は柿沼幹夫ほか多くの研究者が指摘する甲府盆地や静岡清水平野、足柄平野に存在する「金の尾式」とは成立事情の異なる土器型式であること、埼玉県「岩鼻式」と兄弟関係にあることを追認した。

(2018.12.24 稿了)

資料調査に当たり以下の諸氏に教示を得た。

磯崎 一、稲垣自由、大島慎一、諏訪間順、立花 実、土屋了介、直井雅尚、中嶋由起子、西川修一、羽毛田伸博、古屋紀之、村田健二

青木一男 1998「長野盆地南部における後期編年」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 5 長野市内その3 松原遺跡 弥生・総論 弥生後期 古墳前期』219-229p

稲垣自由 2015「甲府盆地における土器の地域性」『列島東部における弥生後期の変革』

臼井直之「5. 後家山遺跡出土の曲柄装着鉢について」『後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ』佐久市教育委員会 中期栗林式期の曲柄鉢は中野市七瀬、長野市篠ノ井遺跡群から出土している。

内堀団 2014「SK001 出土の有東式土器について」『森平遺跡 寄塚遺跡群 今井西原遺跡 今井宮の前遺跡』172-173p 長野県埋蔵文化財センター 内堀は長野県内出土の有東式土器の集成を行った。

柿沼幹夫 2015「北川谷遺跡群編年と岩鼻式・吉ヶ谷式土器との編年比較対照」『列島東部における弥生後期の変革』

小山岳夫 1990「信州佐久平弥生文化の特質」『佐久考古 6 号 赤い土器を追う』145p 3 行目に「日本最高標高地点の弥生文化」と記載した。

小山岳夫 2017a「甲府盆地一円と長野県佐久盆地・茅野地域の弥生時代後期の繋がり」『山梨県考古学協会誌』第25号

小山岳夫 2017b「弥生時代の炉 再々考」『長野県考古学会誌』第155号

小山岳夫 2018「南を目指した佐久の弥生人」『山梨県考古学協会誌』第26号

佐藤兼理 2017「中部高地型櫛描文土器分布域における竪穴住居設計原理」『駿台史学』第160号「短辺張隅丸方形」「朝光寺原型住居」の記載は64-65p

立花 実 2009 「大磯町馬場台遺跡第19地点の資料をめぐって」『南関東の弥生土器～後期土器を考える～』164-166p 立花はこの時点でこの資料と金の尾式との関連を指摘している。

直井雅尚 2001 「弥生中期から後期へ」『長野県考古学会誌』93・94号 「多段帯状施文系」は神村透が最初使用し、直井が土器様相、分布範囲等について検証を進めている。

中嶋由紀子 2014 「相模湾岸の土器様相について」『久ヶ原・弥生町期の現在』西相模考古学研究会 該当する中央高地系櫛描波状文甕は 17p第2図に掲載。中嶋も立花と同様に相模出土の櫛描文甕と甲府盆地との関連を指摘している。

中山誠二 1999 「弥生時代の編年」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）山梨県

馬場伸一郎・遠藤英子 2017 「弥生中期の栗林式土器文化圏における栽培植物」『環境と人類』第7号 本論では、栗林式が波及する埼玉県北西部の熊谷市北島遺跡や前中西遺跡でも複合的な穀物栽培が行われていたことを指摘している。信州系＝コメと雑穀の複合栽培という図式が成り立つのではないか。

浜田晋介 2009 「朝光寺原式土器の編年と共伴土器」『南関東の弥生土器2』

平林大樹ほか 2014 「Ⅳ遺物 3長野女子高校校庭遺跡出土の北陸系土器」『長野女子高校校庭遺跡』93-97p

【参考文献】

林 幸彦 1984 『北西の久保一第1次発掘調査報告書一』佐久市教育委員会

小山岳夫 1987 『北西の久保一第2次発掘調査報告書一』佐久埋蔵文化財調査センター

末木健ほか 1987 『金の尾遺跡 無名墳（きつね塚古墳）』山梨県教育委員会

篠崎健一郎 1991 『古城』大町市教育委員会

篠崎健一郎 +1992 『中城原』大町市教育委員会

直井雅尚ほか 1996 『竹淵遺跡Ⅱ』大町市教育委員会

保坂和博 1997 『油田遺跡』山梨県教育委員会

小池岳史ほか 1995 『家下遺跡』1996 『家下遺跡Ⅱ』茅野市教育委員会

瀬川拓郎 2007 『アイヌの歴史』

山田成洋ほか 1990 『川合遺跡（遺構編）本文編』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

沼津市教育委員会 1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ（遺構編）Ⅱ（遺物編）』